

おもしろさについての導入研究（後篇）

——MURRAY S. DAVIS, *That's Interesting!*: Towards a Phenomenology of
Sociology and a Sociology of Phenomenology*（訳稿）——

内 海 透 雄 ・ 大 秦 一 浩

第Ⅲ部 議論

1. おもしろくない命題

見てきたように、聴衆が或る命題を「おもしろい」と感じるのは、まだ知らなかった真実を伝えてくれるからではなく、そのかわりに聴衆が既に知っていると考えていた真実は誤りだと伝えてくれるからなのである。換言すれば、おもしろい命題は、聴衆の予想基盤^{assumption-ground}の一面を否定するものであり、おもしろさの索引において、否定されるこの予想基盤の様々な面は分類したところである。これは「おもしろい命題」の特質を定義するものであるから、或る命題がおもしろいかどうかを判断する基準としても用いることができる。

もし、聴衆が或る命題をおもしろいと判定する基準が、予想基盤の一面を否定することだとしたら、或る命題をおもしろくないと判定する基準は、予想基盤の一面を否定することではない。命題が聴衆の予想基盤の一面を否定し得ない3つの場合があり、それゆえ、聴衆がおもしろくないと感じる命題の一般型式が3つある。

第一に、聴衆は、もし或る命題が予想基盤の一面を否定するかわりに、予想基盤の一面を肯定するとしたら、その命題をおもしろくないと見なすだろう¹。（例えば、「夫はしばしば妻の政治に対する態度に影響を及ぼす」。）要するに、

* *Philosophy of the Social Sciences*, I (1971), pp. 309-344 Printed in Great Britain

その命題は、聴衆に「事実だと思われることは、実のところ、事実なのだ」、
「あなたがいつも真実だと考えていたことは、実際に、真実なのだ」と言
っているのである。現象学が存在論なのである。この型式の命題に対する聴衆
の反応は、「そんなことは自明だ！」ということになろう。

第二に、聴衆は、もし或る命題が予想基盤の一面を否定または肯定するか
わりに、予想基盤のどんな面にも全く言及しないとしたら、その命題をおも
しろくないと見なすだろう。(例えば、「エスキモーはユダヤ人よりも…しがちで
ある」。)要するに、その命題は、聴衆に「実際に真実であることは、あなた
がいつも真実だと考えていたことと全く関係がないのだ」と言っているのだ
である。現象学が存在論に無関係なのである。この型式の命題に対する聴衆の
反応は、「そんなことは的外れだ！」ということになろう。

第三に、聴衆は、もし或る命題が予想基盤の一面を否定するかわりに、予
想基盤の全体を否定するとしたら、その命題をおもしろくないと見なすだろ
う。(例えば、「社会的な要素は個人の行為に何ら影響をもたない」。)要するに、そ
の命題は、聴衆に「事実だと思われることすべてが、事実では全くないの
だ」「あなたがいつも真実だと考えていたことすべてが、実際には、虚偽な
のだ」と言っているのである。現象学が存在論に正反対なのである。この型
式の命題に対する聴衆の反応は、「そんなことは不合理だ！」ということにな
ろう。

どうして人はおもしろくない命題をわざわざ主張するのであろうか？ お
もしろくない社会理論はしばしば、社会科学者の仕事とは理論の構築と検証
に関する教本的規定に従って導き出され確証されるあらゆる理論を主張する
ことだけだと考える者によって、意図的に主張されるのである。実際に、社
会科学における(そしておそらく自然科学においても)「^{Mediocre}二流」の者とは、
科学的手順における教本的規定を、あまりに文字通りに、あまりに排他的に
用いる者のことと定義される。それは、いわゆる「^{creative spark}創造の閃き」を欠く者が、
実のところ聴衆の予想基盤を考慮に入れることができない者であるという、
上述の議論からも明白であろう²。

しかし、社会科学の「^{stars}大家」でさえ、時にはおもしろくないと思われる命
題を主張する。これは一体どうした事情によるのだろうか？ 大家自身が時
に二流に墮することを除けば、その過ちは大家にではなく聴衆にあるのかも

しれない。命題がおもしろいかおもしろくないかは、ひとえに聴衆の予想基盤に係っている。もし聴衆が、立派な社会学者によって主張された命題に、自明さ、的外れ、不合理さを感じるとしたら、それはその命題が本来意図された対象以外の聴衆の注意に働きかけたからなのかもしれない。或る聴衆における、或る予想を単に肯定するだけであつたり、いかなる予想にも的外れであつたり、予想基盤の全体を無効にしたりする命題は、別の聴衆における、或る予想を否定し、いくらかの予想に妥当し、予想基盤の全体に調和するようまとめられていたのかもしれない。外部の聴衆が、内部の聴衆に本来向けられていた命題を、偶然に閲覧することは、今日ありふれた出来事である。今日の学界は、互いからも常識世界^{common-sense world}（バーガーとルックマン、1966）からも、ますます疎遠になりつつある専門化した派生学界（専門分野）から構成されているのだが、それらはまた、内部で生じた命題を、他の専門分野に対しても常識世界^{common-sense world}に対して、翻訳しようと試みているのである。これらの学際化^{interdisciplined}したあるいは大衆化した命題の一つに遭遇する聴衆は、その命題が新しい聴衆の予想を考慮に入れて特に企図されたわけではなかったために、その命題をおもしろくないと感じがちなのである。

2. 絡みあった社会要因

もし、聴衆が、或る主題について彼らが持っている予想を攻撃する命題は何であれおもしろいと感じるのだとしたら、おそらくおもしろい命題を主張するために人がなすべきことは、第一に、主題が何であれ、聴衆の予想がいかなるものであるかを特定することであり、第二に、それを論破する命題を提示することだけである。あいにく、聴衆の予想を論破する命題を提示することがたいい易しい（前述したおもしろい命題の索引を参照するだけでよい）のに反して、この否定されることになる聴衆の予想がいかなるものかを正確に特定することはたいい難しい。

或る主題についての聴衆の予想を特定することは、この予想が必ずしも統一されたものとは限らないので、たいい難しいのである。マルクス以来、我々は、理論上の予想基盤における社会の土台の中でのいかなる区分も、理論上の予想基盤それ自体の中に区分をもたらしことを意識している。聴衆はしばしば、様々な社会の傾向に沿って分節^{audience segments}されるので、或る分節された聴衆

によって保持される主題についての予想は、別の分節された聴衆によって保持される主題についての予想と一致しないということがあり得る。聴衆の予想を特定することに関わる困難を明らかにするために、意図した聴衆の全員がおもしろいと感じるであろう命題を主張したい者が、その予想を考慮に入れなければならない最も重要な聴衆の分節^{audience segments}のいくつかを考察しよう。

社会構造における聴衆の根本的な区分は、或る主題について常識的な予想を持っている人々と、その主題についての予想が知的な専門性や専門分野によって決定される人々との間にある（バーガーとルックマン、1966）。これは、一方の側でその主題について「^{Conventional Wisdom}一般通念」を持っている「^{Laymen}門外漢」と、他方の側でその主題について「^{Esoteric Knowledge}深遠な見識」を持っている「^{Experts}専門家」との間の区分である。これら2つの領域それぞれの中に、さらに派生区分が生じており、聴衆の予想すべてを特定することをさらにいっそう困難にしており、そして結果的に、普遍的におもしろいと思われる命題を創造することをさらにいっそう困難にしているのである。

門外漢と専門家の両者に保持される主題についての予想は、その主題についてのいかなる命題にとっても、あまりに多様で、或いはあまりに曖昧であるため、普遍的にはおもしろいと思われ難いかもしれない。主題に対する門外漢の予想の多様さは、社会学で用いられるありふれたカテゴリー——年齢、性別、階層など——、或いは社会学で用いられる、より微細なカテゴリーの傾向に沿っているかもしれない。主題に対する専門家の予想の多様さは、たいてい或る専門分野、或いはその専門分野の中で主流派争いをしている或る学派における構成員の傾向に沿っている。門外漢にも専門家にも予想が一致していない主題について、何かおもしろいことを述べるのは簡単でないことが分かるだろう。もし事実であると思われることが一致していないならば、事実であると思われることを否定するのは困難である。

或る主題についての門外漢や専門家の予想は、社会間の距離のみならず、時とともに異なることもあり得る。過去において合意された予想は、たいてい現在において合意された予想よりも偉大であると見なされるゆえに、おもしろい命題を主張したいと望む人々は、しばしばその主題の所謂「^{Traditional View}伝統的見解」を論破しようとする。しかし実際には、昔からある「^{Traditional Assumption}伝統的予想」は、今まさにある「^{Contemporary Assumption}現代的予想」と同様に特定するのが困

難であるとたいてい判明する。

しかも、或る主題について門外漢や専門家が真実であると予想するものは、過去から変化してきたのみならず、未来へと変化してゆく過程にある。年配の世代にとって当たり前である予想と異なる、或る主題についての新しい予想が当たり前になり始めるのは、特に若年世代においてである。若者に次第に受け入れられてゆくこの新しい予想は、「^{Vanguard Assumption}前衛的予想」と呼ばれることもある³。

もし、すべての門外漢かすべての専門家のどちらか一方にだけおもしろいと思われるであろう命題を主張することの主たる問題が、彼らの^{baseline assumption}基準となっている予想がしばしば「一致していない」とか「^{formless}揺れ動いている」という事実に関わるならば、門外漢と専門家の両方におもしろいと思われるであろう命題を主張することの主たる問題は、彼らの基準となっている予想が異なっており、しばしば「^{incommensurate}均等でない」という事実に関わる。

^{intellectual specialties}学術上の専門領域の多くが常識世界から乖離していること（バーガーとルックマン、1966）は、今や一般的に認められるようになったけれども、命題の生成にとってこの事実が含意するところはよく知られていない。現象学的レベルにおいて、一般通念と深遠な見識との間にあるこの乖離は、常識世界の予想を否定する命題が主張される時に生じたのである。専門分野は、専門家を自任する人々が、門外漢の予想を論破した命題を受け入れ始めた時に形成された。専門分野が発展するにつれて、常識世界で当たり前になっている予想を単に論破する命題として始まったものが、今や当の専門分野における当たりの予想となったのである。専門分野が成熟期に至った時、——これが重要な点なのだが——、その時期に生成されたすべての命題は、常識世界で昔からの基準では当たり前になっている予想ではなく、当の専門分野で新たな基準として当たり前になった予想に差し向けられるのである。換言すれば、常識世界の予想との^{ground-assumption}弁証法的関係において始まった専門分野は、当の基本的な予想という内部との弁証法によって、進歩発展するのである。

専門家と同様に門外漢にもおもしろいと思われるであろう命題を主張したいと望むいかなる者も、この二重の弁証法的関係というジレンマに対処しなければならない。一方で、彼の命題は、専門分野の^{ground-assumption}基盤的予想を否定しさえすれば、専門家に関心を起こさせるだろう。他方で、彼の命題は、常識世界

の基盤的予想を否定しさえすれば、門外漢に関心を起こさせるだろう。しかし、専門家の基盤的予想はすでに門外漢の基盤的予想を否定するものであるがゆえに、彼は（それが専門家の基盤的予想を否定するゆえに）専門家に関心を起こさせるいかなる命題も、（それが一般人の基盤的予想を肯定するゆえに）一般人に関心を起こさせないと気づくだろう。逆もまた然り。一方にとっておもしろいことは、他方にとって自明なことであろう。

学界において人はたいてい、一方の警笛を把握し、他方を無視することによって、すなわち彼の命題を考慮するであろう潜在的な聴衆を、同分野の専門家に限定し、門外漢の意見を気に掛けないことによって、このジレンマを解決する。彼はたいてい、彼が攻撃したいと思うまさにその基盤的予想を持っている同業者によってのみ精査される専門誌や専門紙に、彼の命題を公表するだろう。しかし、専門家である読者によっておもしろいと思われるこれら専門誌や専門紙の命題は、実際には「その主題における専門家を除けば、すべての人が真実であると考えerことは、実のところ真実である」という形式だということに注意すべきである。

専門家ではない人たちの注意のもとにもたらされるまで、その命題がこの形式だとは誰も認識しないだろう。しかしながら、或る人の命題が、彼の分野の専門家によっておもしろいと思われれば思われるほど、彼はそれを専門家ではない人たちの注意へと持ち込む気になるだろう。もし彼が、同業者に関心を起こさせた命題を、専門家ではない友人に明かすほど愚かであるとしたら、彼はたいてい無感動な友人を見るはめになるだろう。もし彼が、新聞や雑誌による大衆化を通じて、その命題をより広く公にばらまくほどさらに愚かであるとしたら、彼は、もっと幅広い人々に、彼の専門分野に実りがな^{interestingness}いということを確認させることしかできないだろう。

要するに、学術上の専門領域の基準となる予想と常識世界の基準となる予想とが均等でないという事実は、前者において好評であった命題が、後者においてはたいてい不評であるという事実を招いている。専門家がおもしろと感じた命題の大衆化を試みる者は、専門分野の言論世界と常識世界の言論世界との間にある翻訳可能性の根本的な不備を覆い隠すために、しばしばそのま^{interestingness}まの専門用語に頼らなければならないのである。彼らは、意識的でないとしても直感的に、専門家の命題がもつ「おもしろさ」とは、外国人作家の

「詩」のように、翻訳の中で道に迷うものなのだと気づいているのである⁴。

3. 解きほぐされた社会要因

おもしろいと思なされるために或る命題が反対しなければならない、
the various audience segments
多様に分節された聴衆が皆もっている予想のすべてを考慮すると、広範な関心を引き起こす命題を今までに主張してきた者がいるというのは驚くべきことである。しかし、幾人かの社会理論家が、一般的におもしろいと思われる命題を、折にふれて確かに表明するという事実、おもしろい命題を生成することの問題が、一見したところほど複雑ではないという可能性を、我々に伝えるはずである。

分節された聴衆は雑多であるけれども、或る抽象化のレベルでは、分節された聴衆の予想は2つしかない。それゆえ、或る人が聴衆の予想を簡潔にするために用いることのできる技術の1つは、その予想を考える上での抽象化のレベルを引き上げることである。彼の命題は、聴衆の予想を攻撃する際の抽象化のレベルが高ければ高いほど、聴衆の予想とたくさん重なることだろう。最終的には、おもしろさの索引において見たように、彼は或る主題について聴衆の予想がただ2つしかあり得ない抽象化のレベルに至るだろう。聴衆には多くの分節があり得るのだが、しかし或る抽象化のレベルにおいては、どの分節においても聴衆は或る主題について「Xである」か「Xでない」かどちらかを予想するはずであり、それゆえどの分節においても聴衆は、「Xである」という予想に対して「Xでない」と主張する命題か、「Xでない」という予想に対して「Xである」と主張する命題か、どちらかをおもしろいと感じるだろう。例えば、分節された聴衆はそれぞれ或る現象がどの程度一般化できるかについて意見を異にするが、現象を定義する抽象化のレベルを引き上げる社会理論家は、分節された聴衆のすべてを2つのグループ、すなわち、この抽象的に定義された現象が全く一般化できるものだと考える人たちと、この抽象的に定義された現象は単に部分的なものだと考える人たちに区分することができる。分節された聴衆をこのように分類すると、今や彼は、現象が実際には部分的なものだと主張することによって、分節された聴衆の前者のグループに関心を持たせることができ、或いは、現象が実際には一般化できるものだと主張することによって、分節された聴衆の後者のグループ

に関心を持たせることができるのである。多数派、少なくともその評判が彼にとって重要な人たちの多数派を形成する、分節された聴衆の予想へ命題を対抗させることによって、社会理論家は、自らの命題が、普遍的でないにせよ広範な関心を引き出すことに気づくであろう。

もしも、単に多数である以上に、普遍的な関心を成そうとさらに望むならば、社会理論家は別の方法で対処することができる。多数の分節された聴衆^{the segments of his audience}の予想を2つにまで絞れるならば、彼はこの予想の二元性をさらにいっそう切り詰めることが期待できる。彼は、すべての分節された聴衆の予想基盤を1つにまとめ、多くの対抗者を単一の反対者——敵——にまとめることが期待できる。論破されることになる予想のすべてを、「他方の側」の単一の（間違っ）予想に統合するという修辭的な技術は、「一致創造」^{Consensus Creation}と呼ぶことができるだろう。

一致創造は、三つの段階を踏んで行なわれる巧妙な作業である。第一段階では、社会理論家は、一致していないということを、一般的に考える（「半分が『Xである』と考え、半分が『Xでない』と考える」）のか、特定の社会学的カテゴリーの傾向に沿って考える（下流階層は『Xである』と考える一方で、上流階層は『Xでない』と考える）のか、適切にカテゴリー化された専門分野の傾向に沿って考える（^{Structural Functionalists}構造機能主義者は『Xである』と考え、^{Symbolic Interactionists}象徴的相互作用主義者は『Xでない』と考える）のか、いずれの不一致状態であるのかを明確に述べる。第二段階では、彼はこの明らかな不一致状態がより抽象化の進んだレベルにおいて、実際には一致する（「しかし、これらのグループはともに、実際には『Yである』という同じことを言っているのだ」）と主張する。最終段階では、より抽象化の進んだ予想の一致を創造してあるので、彼は今やそれを否定する準備が整っている（「しかしながら、それらはともに誤りである。実際には『Yでない』が真実なのである」）。

社会理論家の分節された聴衆すべては、その全員が共有する基本的な予想（それは、聴衆自らが**本質的に**予想したのだと彼が指摘するまで、聴衆自身気づかなかったかもしれない）を論破するゆえに、今や彼の命題をおもしろいと感じるであろう。しかしながら、自分たちが或る主題についての或る予想を本質的に有しているということを聴衆に納得させるには、修辭技法以上のものが必要である。それは、その主題について実際にはどのような予想を

聴衆が有しているのか知ることである。もしも、社会理論家が、実際に有していると聴衆に納得させようとする予想が、彼らが実際に有している予想と、あまりにも食い違っているとしたら、聴衆は彼を「藁人形」——なま身の人間が今まで実際に有していなかったのだから、たやすく吹き倒される予想——を据えているのだと非難することだろうし、彼らは間違いなく彼の聴衆にならない。

常識世界か、学術上の専門領域の世界か、どちらかにおいて、社会理論家は、伝統的予想、現代的予想、または前衛的予想のいずれかについて論破される可能性を秘めた予想の創造を試みることもある。3つのすべてにとって、この時間的に限定された一致創造の形式は、代表的な著述家たち——過去の人物、現在の人物、または予言的に述べる人物——を対象として選択し、どの人物もみな或る主題について本質的に同じことを述べているということを明らかにし、その主題における彼ら共通の見解は、^{Refutandum}「論破されるもの」——社会理論家が論破しようとしている、様々なかたちで現れているその時代の基本的な予想のすべて——を具体化すると主張するのである。例えば社会学の場合、幾人かの社会学者が「社会学の或る伝統」のみならず「社会学の伝統」を、或いは「今日の幾人かの社会学者の或る見解」のみならず「社会学者の現在の見解」を、或いは「社会学における可能性としての傾向」のみならず「社会学における来たるべき傾向」を代表できることが示されねばならない。もしまた、社会理論家が、それらの代表的な著述家たちが或る主題について予想するものは、実のところ彼の聴衆自身がその主題について予想するものであるということを、聴衆に納得させることができるとしたら——たとえそれが不明瞭なだけであっても——、彼は、聴衆の注意を引くための論戦が生じる舞台を設けたのである。社会理論家は今や、聴衆の関心を捕えて離さないために、聴衆の予想に対して攻撃を開始する準備ができています。聴衆の予想の防御に弱点があることを彼がよく知っているという事実によって、その試みにおいて彼が成功する公算は増大する。というのも、——聴衆の予想を明瞭に表現した人物なのであるから——彼自身がその構築に参画していたからなのである。

説得力を創造する論理手順が^{Q.E.D.}証明終了 (*Quod Erat Demonstrandum*!) で終わる一方で、関心を生みだす修辞手順は^{Q.E.R.}論破終了 (*Quod Erat Refutandum*!)

で終わるのである。

社会理論家にとって、常識世界ならびに専門学界の両方においておもしろいと思われる命題を生成することは非常に難しく、それゆえ、そのような作業はたいいて試みられることがない。しかしながら、命題に統一的な関心を引き起こさせる試みに価値のある場合もある。

門外漢と専門家は、その主題についての予想が図らずも並立する時、同じ命題をおもしろいと思うだろうが、見てきたような事情があって、主題についての彼らの予想はたいいて一致していない。それにもかかわらず、門外漢と専門家の予想は時に一致することがある。というのは、両者の予想は上述の弁証法的な方法で発展しているのだが、前者の予想は後者の予想よりもゆっくりと変化しており、時として二段階遅れることがある。これが生じた時に、一般的な関心を引く命題が可能となるのである。

社会理論家にとって専門家と同様に門外漢に関心を持たせる命題を主張するのが困難であるもう1つの理由は、専門家が予想をたてる主題が、しばしばあまりにも世に知られていないために、門外漢がその主題について全く予想を持っていないということである（これは自然科学においてさらに甚だしい問題である）。しかしながら、社会理論家は、これらの主題について——いかなる予想であれ——予想を持つことの必要性和価値を、門外漢にまず感じさせることができるならば、これらの深遠な主題に関する専門家の命題に関心を持たせることができる。専門家は、まず門外漢の継続している実践的な活動における具体的な効果を論証することによって、門外漢にとって或る主題がこのように「意義深い」のだ——すなわち、主題が彼らの継続している理論的な活動の課題である——と思わせることができる。^{Importance}重要性は関心の母である、たとえ^{Refutation}論破が父であるとしても。

4. おもしろい命題の関連へのさらなる研究

私は、私がおもしろさの索引を最終的なものとする意図を持たないということを改めて強調しておきたい。おもしろい命題の収集にも分類にも、さらなる改良が必要である。

おもしろい命題を鑑定するさらに精巧な方法が開発されるべきである。社会学の場合、「自分の気に入った命題の名を5つあげよ」と社会学者に尋ね

る調査は有益となるだろう。或いは、専門分野の公的機関誌の選考員が何をおもしろいと思なすか確かめるために、^{American Sociological Association}アメリカの社会学者の中で見どころとして選ばれた社会学の命題を分析してもよい。また、一般的な関心を喚起した社会学の命題は、^{Bobbs-Merrill}ボブス・メルル社の再版シリーズか、様々な出版社が大衆向けに刊行している「選書」かどちらかで再版に選ばれた論文においても見つけることができる。

より公式の、おもしろい命題のカテゴリー体系も開発されるべきである。それは、^{Aristotle}アリストテレスが『^{Organon}オルガノン』によって、^{Kant}カントが『^{Critique of Pure Reason}純粋理性批判』によって、^{Hegel}ヘーゲルが『^{Logic}大論理学』によって発展させてきた、可能性のあるすべての命題（判断）のカテゴリー体系、或いはもっと近年の体系の傾向に沿って形成されるだろう。さらに、より低い抽象レベルの派生カテゴリーを規定することによって、そのカテゴリー体系の有用性は、高まることだろう。

読者は、おもしろい命題のカテゴリー体系を個人的な用途に合わせて改めたいと思うかもしれない。このようなことは、彼自身がいつも魅力的だと感じている社会理論を、おもしろさの索引に当てはめようと試みることで、非公式に行なうことができる。カテゴリー体系に当てはめるのが簡単な社会理論は、彼自身がおもしろいと感じる社会理論の一般的型式を、主観的にではあるが妥当性をもって気づかせてくれるだろう。カテゴリー体系に当てはめるのが簡単ではない社会理論は、それを付け加えるためにおもしろさの索引がいかに改訂されまた拡張されるべきか、客観的な妥当性をもって気づかせてくれるだろう。

命題への聴衆の関心を刺激することは、見てきたように、一部は修辭的な問題である。したがって、修辭の技術や実践に関する古代・近代両方の著作に学ぶことから、聴衆の関心を引き起こすのに用いられる修辭的な方策についてさらなる見識が得られるかもしれない。

また、関心を引く理論がある一方で、そうでないものがあるという事実の心理学的根拠を知ることにも有用である。^{Gestalt Psychology}形態心理学は、おもしろい理論を心理学的に説明するのに、最も実りのあるアプローチになりそうである。感覚的な関心を引き起こす対象がその背景に逆らう形態をどれほど伴っているかについての高度に発達した分析は、認知的な関心を引き起こす命題が予想基

盤に背反する主張をどれほど伴っているかについての前述の分析と興味深い類似を提供するのである。

関心を引くのは、絵画や人物のように、命題のほかにもある。予期と意外性という観点で見ると、おそらく我々は同じようにそれらの惹きつける力を理解するようになるだろう。それから我々は、絵画は形式や内容が受け入れられた審美的な慣例に矛盾する限りおもしろいのであり、また人物は彼らの性格や行為が地位や役割で予期されるところに反する限りおもしろいのであると気づくだろう。しかしながら、いかなる結論でもそれが出される前に、標準から外れたものの範囲や方法はもっと明らかにされていなければならない。

結局、社会科学（そして自然科学）におけるおもしろい命題についてのさらなる研究が、常識世界の理論的構造について、我々がもっと多く学ぶ手助けになるのである。もし、おもしろいと思われる命題が、この慣例的な構造の様々な面を否定するものであるならば、それを否定するおもしろい命題を研究することによって、我々は間接的にこの慣例的な構造の性質を理解できるようになる。そのうえ、我々は、いくつかの社会的立場にある個人に関心を持たせるが、他の社会的立場にある個人には関心を持たせない命題を研究することによっても、間接的にこの慣例的な構造における多様さを理解できるようになる。命題の真実性にとらわれなかったら、誰かがその命題をおもしろいと感じるという事実だけが、その命題から我々が学ぶことが多いということを示すのである。

5. さらなる研究へのおもしろい命題の関連

たいていの同時代の社会研究、特に社会学的研究のありふれた批評は、皆が知っていることや誰も気につけないことを言うのはつまらないというものである。社会科学が今日一般的に実践している方法における、このような欠点が——おそらく他のどんな単一理由よりも——、専門分野の地位が比較的低いことや、すぐれた学生の関心を引くべき能力が比較的低いことや、公衆にそして当の専門家にさえ喚起させる熱意が比較的低いことを招いている。現在、活発ではない原因を発見し解決法を提案するために、私は理論上の命題をおもしろくさせるものに関する前述の議論の、社会研究、特に社会学的

研究への関連を明らかにしようとする。社会科学者が、今一度彼らの専門分野の欠陥にもっとよく気づくようになり、専門分野を退屈にさせてきた古い手順を、活発にさせる新しい手順に変革する気持ちを生じさせることが望まれる。

我々は、おもしろい命題をおもしろくない命題と区別する基準は、前者が後者とは異なり聴衆による明確な予想を否定するのだということを見てきた。社会科学に痕跡を残してきたすべての著書や論文を分析すれば、それらが**おもしろさの索引**において列挙された様々な方法でこの基準を満たしていることが証明されるだろうと、私は信ずる。もし、これがその通りであるとしたら、社会科学に現在活力がないのは、社会科学者が自身の研究においてこの基準を**全くもって**満たそうとしていないという事実¹³に直結している。社会科学者の研究に他のどんなおもしろい成功例があったとしても、それは彼らがこの基準を**意図せず**に満たしているということ¹⁴でしかない。今日最もおもしろいと見なされている社会科学者は、実際にこの基準を自身の研究に**直感的**に適用する人たちである。しかしながら、本稿の主旨は、社会生活についてのすべての学生がこの基準に従って自身の研究を**意識的に**査定するよう教えられるならば、社会科学が全体として大いに改良されるだろうということを示すことにある。

^{Glaser}グレイザーと^{Strauss}ストラウス（1967）は、とりわけ近代の社会学が沈滞した状態にあるのは、「社会学的方法論」に関するたいていの課程や教本が、理論の実証にあまりにも注意を払い過ぎており、理論の生成に十分な注意を払っていないという事実¹⁵に広く起因するということに、めざとく気づいた。しかし、グレイザーとストラウスは、この不備の改善策を十分正確には詳述しなかった。必要とされるのは、より多くの社会理論ではなく、より多くのおもしろい社会理論なのである。社会生活についての学生は、単にデータの体系から理論を生成する方法だけでなく、データの体系からおもしろいと思われる理論を生成する方法を知らなければならない。

グレイザーとストラウスは、理論を生成するためには、データに深く精通していることが必須であると考えている。しかし私は、**おもしろい**理論を生成するためには、データに関する聴衆の従来の予想についても同様に深く精通していることが必須だと付け加えよう。おもしろいと思われるために、理

論は当該の現象について従来予想されたことと対決しなければならない。聴衆は、精神病院についての単なる理論はいかなるものであってもおもしろいと感じることはなく、精神病院についての理論が既成観念に衝突する場合のみおもしろいと感じるであろう。それゆえ、自身の論題についておもしろい理論が創造できるという確信を得たい社会研究者は、聴衆の予想を否定することで聴衆の注意を引く命題を生成し始めさえする前に、まず自身の論題について聴衆が真実であると予想しているものに精通しなければならない⁵。

より一般的には、社会科学における方法論についての課程や教本は、影響力のある社会理論の構築が知的な空白状態の中には生じないのだと分かるよう、学生に教授すべきである。理論構築に対する現今の「論理的」なアプローチは、見てきたように「現象学的」なアプローチのみならず、「生態学的」なアプローチによっても補足されるべきである。というのも、理論をおもしろくさせるのは、理論の内的な発展ではなく、聴衆の予想に対する外的な関係なのである。それは、理論がデータから帰納される、或いはより抽象的な原理から演繹されるという方法を学生に知らせるだけのことではない。また、学生は、或る主題に関する自らの理論が、聴衆の注意と信奉という乏しい資源をめぐって、少なくとも別の1つの理論と争わなければならない環境におかれることになるということを認識するようにもならなければならない。この別の理論というのは——それは、まずうまくいったものだったのだが——、一定のデータの体系に関して、聴衆がすでに「知っている」（すなわち、真実であると予想する）と考えるものから成り立っている⁶。言い換えれば、理論構築とは、独立した論理的、或いは経験的な企図が、一定のデータの体系に関して、聴衆がすでに「知っている」ものから分離し関わりをもたないものとして扱われるべきではないのである。というのも、聴衆は、以前推定した物事の基準に理論が反抗する場合に限り、新しい理論をおもしろいと思わず——それが主張している内容に注意を払う——だろうからである。

要するに、学生は、或る主題について自身の理論を主張する前に、その主題についての聴衆の予想をいつも考慮に入れなければならないということを習得すべきである。彼が聴衆の予想を特定することができるほど、彼はより印象的にそれを攻撃することができるだろう。明瞭に理解された聴衆の予

想をこのように否定することがおもしろさの真髄である。それは、長命な研究を短命な研究から分かつものである。このような聴衆の予想を意識的に自覚することを方法論的な手順の標準とする学術分野は、その分野の中に流布するおもしろくない命題に比しておもしろい命題の比率を高め、結果としてその分野の関心指数^{Interesting Quotient} (I. Q.) を他の分野の関心指数に比して増加させ、それゆえ公衆でも専門家でも熱中させるような広く信用される学術的な企てが増加するという成果を得ることだろう。

6. おもしろさと大学

ここで詳述したおもしろさの分析は、社会科学者（そして他分野の科学者）の研究外の活動に、特に課程の提示やカリキュラムの開発といった領域にも、影響を有する。

課程は、ますます分化する構造化された雛型の上に、たいてい配置される。まず、対象内容^{subject matter}に関する一般論が導入講義において紹介される。それから、この一般論的な枠組みは、課程の残りの部分において、対象内容の特定カテゴリーや実例に適用される。最後に、結びの講義において、この一般論は、その指摘されている限界点と発展性がまとめられるのである。しかし、このような課程を提示することへの構造化したアプローチは、学生がおもしろいと感じるものにはっきりと関わらないゆえに、しばしば学生の関心を捉えることができない。理論構築の場合と同様に、対象内容の内的プロセスにあまりにも関わり過ぎ、対象内容への聴衆の推移する見解にあまりにも関わりがないと、一方を他方から遠ざけてしまうだろう。

しかしながら、課程を紹介することへの現象学・存在論問のアプローチは、構造化したアプローチの不備を克服するだろう。というのも、それは対象内容についての学生の予想の推移にいつでも関係するからである。このアプローチでもって、課程は、対象内容についての学生の常識的な予想を明確に述べることによって始まり、引き続き門外漢の予想に反論して専門家の命題に取って代え、結びには対象内容についての学生のもともとの素朴な見解が新たな洗練された見解に変換されるというプロセスを、手短に総括して学生に明示することとなろう。そのような課程は、学生を引き寄せることに対する目標を知ることのみならず、学生の出発地点——本来「そこに」学生はい

た——を知ること、教師に要求するのである。終始一貫して学生の自然な思考の推移に対応して進められる課程は、学生の関心を引き寄せ、さらに持続させることに何ら困難がないはずである。

カリキュラムも、総じて学生の思考の推移と同時進行されるべきである。今日たいていのカリキュラムにおいて、進展する学生の予想にほとんど注意が払われていないという事実は、教育が「妥当性」を欠いていると学生がしばしば感じるという事実の原因である。或る対象内容についての素朴な学生の予想は、導入レベルにおいてたいてい無視されるゆえに、初学者は特に導入課程（とその教本）をつまらないと感じがちである。もし或る人物の関心が、何か予期せぬことに出くわす時にのみ引き起こされるのだとしたら、予期することが否定されない限り、彼は必然的に導入課程がつまらないと感じるであろう。おそらく、たいていの導入課程において唯一予期されていないことであり、また学生の無関心を引き起こすものを唯一埋め合わせるものとは、社会生活のような複雑な対象内容は規則づけられていないという学生の予想を否定することだけである。不幸なことに、たいていの導入課程がその対象内容において強要する特殊な規則は、単にその分野の「古典言論」^{Classic Statements}から成り立っているのである。この古典言論は、前世代の専門家に関心を持たせた、というも彼らの予想を否定していたからなのであるが、その対象内容について今日の学生が前世代の専門家と同じ予想を持たない限り、この古典言論が現今の学生の関心を引くことはできないだろう。

それにも関わらず、導入課程（とその教本）は、どの学術分野のカリキュラムにおいても欠くことのできない機能を果たしている。というのも、導入課程は学生が上級課程（とその教本）をおもしろいと感じるのに必要な前提条件を設定するからである。導入課程は、上級課程において出される命題が否定するよう明確に設計された対象内容について予期することを生じさせる。おもしろさの弁証法的なプロセスは、或る論題についての明確な予想が形作られた後にのみ生じるので、学生は上級課程のほうが導入課程よりもおもしろいとたいてい感じるのである。これは、導入課程が——たとえそれが上級課程よりもおもしろみが少ないはずだとしても——それがしばしばそうであるようにどうしてもおもしろくならないということを言っているのではない。もし導入課程が初学者に、彼が育った大学外の社会である常識世界に単に順

応するなかで得た対象内容についての予想の多くを、いかにその学術分野の古典言論が実際に論破するのか、詳細に示そうとするならば、導入課程は初学者にとってもっとおもしろくなるだろう。

極最近、大学の一部において、専門家の洗練された命題についての過度の集中に対する反発があった。しかし、この反発は、学生の素朴な予想についての過度の集中に対するものへと変じているようである。どちらの極端さも、もし学生の関心を維持したいならば、避けられるべきである。過去においては、専門家の最新の論説にあまりにも注意が払われ、学生のもともとの予想にあまりにも注意が払われなかったことで、或る論題における学生の関心はしばしば抑圧されてきた。将来においては、学生のもともとの予想にあまりにも注意が払われ、専門家の最新の論説にあまりにも注意が払われないことで、或る論題における学生の関心が抑圧されるように見える。すると学生は、彼らの素朴な見解が無視されていたのと同じく、彼らの素朴な見解が乱されないままであることに退屈することだろう。どちらの場合においても、おもしろいものに当然備わっている、もともとの予想を超越するという事態が生じない。必要とされているのは、出発点としての対象内容についての学生の素朴な見解と、到達点としての対象内容についての専門家の洗練された見解の両方を考慮に入れ、学生を一方から他方へ整然と導く教育学的なアプローチである。このような場合においてのみ、「大学」という用語は「的外れ」と同義ではなくなるだろう。

7. おもしろさの体系化？

おもしろさの索引を構築しようとする際、私はそれを出来るだけ体系的にしたいと望んだ。しかしながら、この試みを進めるにつれ、体系的にしようとすればするほど、それがおもしろくなることを——狼狽しつつ——私は発見した。おもしろさを減らすという犠牲を払い続けながら、この分類を広げ続けるよりも、私のジレンマ自体がおもしろさと体系的なものへの関係について考える基準として役立つかもしれないと思い直すことにした。

この境目のところで、私は次のように進行していった。私は、おもしろい命題の整理箱から、^{Robert Merton}「ロバート・マートンによる『清教主義、敬虔主義、科学』における主張、それによれば原理主義者のプロテスタンティズムと科学

は、彼が著述した当時には、2つの全く異なった精神的価値観の複合から発達したと考えられていたが、実のところ同じ精神的価値観の複合から発達したものである」という、かつて分類していなかったものを取り出した。この論から、私はその論理カテゴリー——(xiii) 進化——、そしてその一般型式——(xiii) a「全く異なる原因から進化した現象であると思われることが、実際には同じ原因から進化した現象である」を帰納した。私の論を体系的に仕上げるための手順によれば——それは以前の場合には十分うまく機能したのだが——、おもしろい命題の一般型式と論理的に正反対のものもまた、おもしろい命題の一般型式になるのである。しかし、ここで面倒なことが起きた。私は、おもしろいはずの (xiii) b 型式の命題「同じ原因から進化した現象であると思われることが、実際には全く異なる現象から進化した現象である」の具体例の一つも見つけられなかったのである。私は自分の手に負えないいくつかの社会理論をこの鑄型に「押し込め」ようとしていることが分かった。できあがったものが独創性に欠け、明らかに不自然であったことに気づいたので、私は (xiii) b 型式の命題の良い例がどこかにあると確信していたし、私の論を解説するのに大変すぐれた例証であった (xiii) a 型式の命題であるマートンの例を失うことが嫌だったのだが、私はついに諦めて私の論をこの新しいカテゴリーによって拡張しないことに決めた。

私の出会った苦難を、全ての理論家がおもしろさと体系性を両立しようとする時に向き合わなければならない、一般的な苦難に抽象化してみよう。もっとも単純な場合を取り上げてみる。或る理論家が、現象(a)について、おもしろい主張を行なう。彼の主張は、現象(a)について聴衆が先に信じていたことに対立するゆえにおもしろい。彼は、彼の主張が、現象(b)について聴衆が先に信じていたことに対立するゆえに、現象(b)に関してもおもしろいということを発見する。しかしその時、彼は、彼が関わってきた2つの現象——現象(a)と現象(b)——が、それ自身の内的プロセスを通じて、3つめの現象(c)と4つ目の現象(d)を発生させることに気づくのである。

	a	b
a	a	c
b	d	b

さて、もし理論家が体系性を望むならば、彼はさらに自らの主張を現象(c)や現象(d)に適用しなければならない。しかし、このように彼の主張を現象(c)や現象(d)に体系的に適用しても、彼の主張がおもしろいままであるという保証はない。なぜなら、彼の主張は、現象(c)や現象(d)について聴衆が先に信じていたことに対立しないかもしれないからである。

それゆえ、偉大な理論家は、この主張がますます多くの現象に適用されるにつれて、自らの主張への関心が薄れてゆく可能性を直感的に知っているのだ、たいていこれらの拡張をほのめかすだけであり、彼の体系を詳述し空欄を体系的に埋めることは、彼のエピゴーネンに委ねるのである。さほど明敏でない門弟は、もとは挑発的であった師匠の主張を、聴衆がすでに保持している新しい論題についての予想に対して——かつて師匠がそうであったようには——注意を払わないという意味において、「機械的に」適用するだろう。

体系は十分おもしろく始まるのだが、体系にはおもしろいままでは終わらないような論理的で社会学的な必然性が多分にある。人はたいていおもしろさと体系性の中間を選ぶはずだ。たやすく両立できはしないのだ。

8. 結論

現象学とは、その語が一般的に用いられているように、そして私がここで用いてきたように、感覚レベルにおける（単なる）外観の研究であり、私の目的にとってもっと重要なことには、認識レベルにおける（単なる）予想の研究である。強調すべきは「単なる」というところである。というのも、或る現象を「現象学的」と称することは、人々が見たり予想したりするものを超えて、何かもっと実存的なものがあるということを含意するからである。しかし、「現象学」という語は、——^{Hegel}ヘーゲルや^{Husserl}フッサールが発展させたところの——別のもっと広い意味を持っており、それは魅惑的に映る偽りの外観や予想のみならず、それらから離れて存在論的に真実であるものへと向かう精神の動き全体を含むのである。私が本稿で展開しようとしたのは社会学的現象学であるが、それは連続したプロセス全部という、より広い意味におけるものなのである。

私は、おもしろいと思われるすべての社会理論が、それらをおもしろいと感じる聴衆の或る心の動きに関わっているということを主張してきた。おも

しろい理論は、それらをおもしろいと感じる聴衆が日常的に当たり前だと思っている予想を暗黙のうちに明瞭に表現し、それからこれらの推定をより高度な——或いはより根本的な——真実の名において否定するのである。しかし、社会学がこの現象学的プロセスに根拠づけられるだけではなく、この現象学的プロセスが社会学に等しく根拠づけられるのである。というのも、聴衆の分節それぞれのもとの予想——このプロセスの出発点——は、社会空間全体に差次的に分布しているからである。それゆえ、おもしろさの社会学とでも呼ぶべき研究分野を十分に発展させるため、或る受容された社会理論から別の社会理論へと聴衆の心が動くことを研究する「社会学的現象学」が、この現象学的プロセスが始まる、門外漢と専門家という聴衆における異なった分節の、それぞれに異なった基準となる理論を研究する「現象学的社会学」と結合されなければならない。

知識の社会学をおもしろさの社会学と区別することは重要である。前者は本質的に確信と予想の研究であり、後者は本質的に確信の解体と構築、予想の変容の研究である。確かなことに、知識の社会学はイデオロギーの通時的変遷を研究してきたが、少なくとも古典型式において、それは信念体系^{belief-systems}を静的な現象であるかのように研究してきた（マンハイム、1936）。すなわち、信念体系の通時的変遷とは、或る静的なイデオロギーが別の静的なイデオロギーに比較的突然置き換わることと見なされてきたのである。他方、おもしろさの社会学は、ほとんど静的ではなく、むしろ動的なものとして見ようとしている。それは、或る信念体系が別の信念体系に置き換えられている、まさにそこに焦点を合わせる。それは、個人や集団における古い理論的予想の威力が、彼らが新しい——反駁的な——理論的命題をおもしろいと感じ始めるのに十分なほど弱まってきた、まさにそこに焦点を合わせる。そして、それは社会学的、現象学的に正確な変化機構を発見することに関係している。しかしながら、以上は、知識の社会学がおもしろさの社会学によって置き換えられるべきことを意味するわけではない。それは、知識の社会学が、おもしろさの社会学によって補足されるべきだということを意味している。というのも、前者の考え方からはどうしても鮮明にできない、理論構造の変化する決定的な局面は、後者の考え方からもっとはっきりと明らかになるからである。

おもしろさについての先述の議論は、^{Thomas Kuhn}トーマス・クーン（1962）によって与えられたところとは全く異なる科学革命のモデルを我々にもたらす。おおまかに言えば、クーンは、科学的な予想や解釈手順（「^{paradigms}パラダイム」）の先の枠組みにとって例外的な具体的経験は、古い枠組みよりも例外的な経験をうまく説明する科学的な予想や解釈手順（「パラダイム」）の新しい枠組みを探究するよう、科学者に動機を与えるということを主張している。しかし、たいていの科学者を、いくつかの具体的例外が彼らに余儀なくさせるまで、受容されている概念の体系に大きな変化を起こすのを望まないものと見なすことは、彼らが保守的であって、個人の望みが欠如し、本来個性というものがあるはずなのに社会学者はもちろん自然科学者の間でさえ共通しているものののだと、見なすことになる。クーンとは反対に、ひとりでに現れる例外を単に待つよりも、私は、古い日常的に受容されたパラダイムが完全に飽きられ、自ら名を成そうとする欲求が、古いパラダイムでは説明できず新しい（なるべくなら自ら考案の）パラダイムで説明できる例外を探究する動機を、多くの科学者に与えると主張しよう。人は、下降する古いパラダイムに付き従うよりも、むしろ上昇する新しいパラダイムへの名声に手を貸すことで、専門分野における、より高い地位を獲得することができる。或る学術上の専門分野で名を成す最善の方法は、おもしろくあること——予想されたものを否定する一方で予想もしないことを断言すること——である。

しかし、あまりにも行き過ぎないように注意しなければならない。驚くべきことと呆れさせることの間、おもしろいこととばかげたことの間には、微妙だが明確な一線がある。見てきたように、おもしろい命題は聴衆が弱く保持する予想を否定するものであった。しかし、聴衆が強く保持する予想を否定しようと試みる者は、正気を疑われてしまうだろう⁷。彼らは常軌を逸していると非難されるだろうし、もし科学者ならば、「^{crackpots}奇人変人」と呼ばれるだろう。もし、靈感を得た者と正気を失った者の違いが、彼らが攻撃しようと選んだ或る聴衆の予想の頑強さの程度においてのみであるならば、おそらくそういうわけで、天才は狂気と紙一重だといつも見なされてきたのである。

本稿において、私は論理命題を分析する新しい方法を提唱しようとしてきた。私は、内容の真実性や形式の論理性を確かめるのと同じくらいに、或る理論が聴衆によっておもしろいと思われる理由について学ぶことが重要であ

ると信じている。

それから、本稿は、解説でもあり奨励でもあった。それは、偉大な理論家の著作をおもしろくしている要因を指摘しようとする限り、解説であった。それは、読者に著作をもっとおもしろくするためにこれらの要因をもっと意識するよう促す限り、奨励であった。私は、おもしろい理論の「生成」^{generation}が、おもしろみのない理論の「検証」^{verification}と同じくらい注意を引く対象であるべきだと主張するのである。この報告は、偉大な理論家を二流と分離する「天分」^{genius}という未開拓のカテゴリーについての導入研究だと見なされるべきだ。

それで何？ 誰が気にするの？

北イリノイ大学にて

注

- 1 しかしながら、自分の予想が他者によって最近強く攻撃されている人は、その予想の1つを肯定する命題をおもしろいと感じることもありうる。古い仮説に対する新たな支援は、近年確信が弱められてきた人たちによって歓迎されるのである。（「常々私が考えていた通りだ！」）
- 2 おもしろい理論をなす者が所持するとして称揚される、想像力に富むという特質は、新奇なものを独創的に想像する能力よりも、他者が伝統的だと見なすものを共感的に想像する能力から成っているのである。
- 3 若者の前衛的予想は、以下のように、年長者の現代的予想を論破しようと試みてきた命題に由来する。年長世代がおもしろいと感じてきた多くの命題は、若年世代が日常的だと感じる予想へと変容することになる。その結果、年長世代に興味を持たせてきた命題——すなわち、年長世代が当たり前だと思う予想を論破しようと試みてきたもの——は、若年世代が当たり前だと思う予想にもはや弁証法的な衝撃を与えないゆえに、若年世代の心にもはや訴えかけないかもしれない。それらは若年世代が当たり前だと思う予想になったのだ！ 例えば、フロイト派の知見は、今日の若者がすでに性衝動を人間の行動の根本動機であると仮定するゆえに、彼らにさほど関心を起こさせないように思われる。
- 4 専門用語とは、或る命題を或る言論世界から別の世界へ翻訳できないということなのである。それは、最初にそれをおもしろい^{interestingness}と見出したまさにその専門家に聴衆を再限定することによって、命題の「おもしろさ」を維持するのである。というのも、専門用語は、学術上の専門分野の基準となる予想に関わっている場合にのみ、意味のある言論単位だからである。
- 5 「文芸批評」^{review of the literature}分野の研究論文や著作が、この機能に従事するのだと思われるかもしれないけれども、たいていの場合、それはさほど適切ではない。たいていの社会研究者は、文芸批評の目的が聴衆の予想を明瞭に表現することであり、単に

修辭的なしきたりを遂行するのではないということをはっきりと理解してはいない。そしてまた、社会研究者は、文芸批評の研究発表の残りの目的が、予想を論破することによって我々の興味を引くことであり、単に予想を確証したり却下したりすることによって「我々の知識を増す」ことではないということをはっきりと理解していない。

- 6 もし、その課題について受け入れられた理論が1つではなく多くのものがあるなら、或いは、この受け入れられた理論が何であるか明瞭でないなら、学生は、競争者を打ち破ろうと試みさえしうる前に、前節で扱われた、自らの理論の様々な競争者を単一の競争相手にまとめるという、予備的な問題にも取り掛からなければならぬだろう。「^{Unite and Conquer}まとめそして攻略する」とは、成功した社会理論家すべてに於てはまる標語である。
- 7 より正確には、或る地点に至るまでは、聴衆が予想を強く保持すればするほど、彼らはそれを否定する命題をおもしろいと感じることだろう。しかし、その地点を超えると、聴衆が予想を強く保持すればするほど、彼らはそれを否定しようと試みる者を常軌を逸していると思なすだろう。この地点を過ぎて自然現象や社会現象についての聴衆の確信を否定しようと試みる者は、事実上、他でもない聴衆の正気を攻撃しているのである。この場合、聴衆は、彼が正気を失っているとは非難することによってのみ、自らが正気であることを守れるのである。

参考文献

- Barton, Allen ^{The Concept of Property-Space in Social Research}
バートン・アレン (1955) 「社会研究における属性空間の概念」, ポール・ラザー
ズフェルド, モーリス・ローゼンバーグ (編), ^{The Language of Social Research}『社会研究の言語』, ニュー
ヨーク, 40-62頁。
- Berger, Peter ^{Luckmann, Thomas}
バーガー・ピーター, ルックマン・トーマス (1966) ^{The Social Construction of Reality}『現実の社会構築』, ニュー
ヨーク。
- Glaser, Barney ^{Strauss, Anselm}
グレイザー・バーニー, ストラウス・アンセルム (1967) ^{The Discovery of Grounded Theory}『根底理論の発見』, シ
カゴ。
- Garfinkel, Harold ^{Studies in Ethnomethodology}
ガーフィンケル・ハロルド (1967) 『エスノメソドロジーにおける研究』, エング
ルウッド・クリフス。
- Kuhn, Thomas ^{The Structure of Scientific Revolutions}
クーン・トーマス (1962) 『科学革命の構造』, シカゴ。
- Mannheim, Karl ^{Ideology and Utopia}
マンハイム・カール (1936) 『イデオロギーとユートピア』, ニューヨーク。
- Merton, Robert ^{Social Theory and Social Structure}
マートン・ロバート (1957) 『社会理論と社会構造』, ニューヨーク。

(本学文学部哲学科4回生・本学文学部文学科准教授)